

# 『十牛図』以前

大多和明彦

(平成 19 年 10 月 4 日受理)

## Bofore "Zyugyuzu"

OTAWA, Akihiko

(Received on October 4, 2007)

キーワード：十牛図, 原罪, 業, 無明

Key words : Zyugyuzu (Ten pictures of the cow), original sin, karma, avidya

### 序

私たちが求めるのは、さしあたっては、生活を安定させるための金であり、さらに生活を揺るぎないものにする名誉・地位である。これらを求めるに汲々となつて、神や仏を求める心(菩提心)など、トンと私たちには起こらない、求めるところか、神仏などは人間の弱い心が作り出したデッチアゲだと、考えている。なぜ人間の心はそういうことになってしまっているのか。

キリスト教では、神仏を求める心(菩提心)が起こらない原因は、人間が背負わされている「原罪=宿罪」に求められている。「原罪」のゆえに、自己中心性という浅ましい姿を人間はとらざるを得ないのだと、キリスト教は説明する。

仏教では、人間がはるかな過去世からの「宿業」に感じがらめ縛られているから、四苦八苦の世界を輪廻するのだと言われ、その「宿業」が根本的な無知である「無明」を原因として生じていると説明される。

しかるにその「無明」という考え方の源泉をたどると、ヒンドゥ教に行き着く。ヒンドゥ教によれば、変転常なきこの世とは、永遠にして不動の梵がその幻力によって引き起こしている幻影である。人々は梵のなすこの業を見抜くことができず、これを真実の世界と思いこんで、苦楽転変の世界に輪廻するのだと、ヒンドゥ教は教えるのである。

発菩提心ということがいかに難しいか、世界の伝統的宗教は、それぞれの表現方法で語っている。本論ではこ

れらの後を追ひ、いかにしたら私たちに神仏を求める心が生じるのかを、考えてみたい。そしてこの心がひとたび起こったとき、私たちは始めて『十牛図』の世界に立ち入ることができるのである。

かくして「十牛図以前」と題する以下の本論では、1)「十牛図」、2)「原罪」、3)「宿業」、4)「無明」、5)「第一・尋牛へ」という次第で、論述が展開される。

### 1 十牛図

禅では、「現実の自己=浅ましい自己中心の自己」が、「真実の自己」つまり人間がそもそも持っている「仏性」をはっきりと見出すにいたるまで、何年も何年も修行に修行を重ねる。こうしてついに「やったー、俺は悟った!」という心境に至る。ところが「お悟り」なんぞと洒落臭いことを言っているうちは、まだまだどうい実はずである。

「さらに参ぜよ三十年」と励むうちに、そのような悟ったという自己意識すらも消えてしまう。真偽、善悪、美醜、聖俗、人生の意義、目的、そういう洒落臭い分別は、総じてなァーンにもないスッカランになってしまう。まるで3歳児である。言ってみれば何も映じてはおらぬ明鏡、塵一つなき一果明珠のごとき心境、ここにまで達しなければならぬ。そのときこの空なる明鏡に「水は自ずから茫々、花は自ずから紅」の光景が生き生きと映し出される。「無一物中無尽蔵、花あり、月あり、桜台あり」の風光がまことに如如と映じる。

そしてこのとき、この一果明珠が、実は「真実の自己=無位の真人=仏性顕現の人」の心、無私となった心にはほかならないことが明らかになる。彼は、上着無し、ネク

タイ無し、肩書き無し、悟り顔無し、インテリ臭さ毛頭無し、一切のレッテルをすっかり捨てて尽くしてしまっている。そんな「無位の真人」は、「無し無し無し」のまま、自分を勘定に入れること全くなき、いつも静かに笑っている。そうして彼は為すともなく、人々を苦しみから脱けださしめ、ついにはすっかり和ませてしまう。「無為にして化す」のである。ここにいたって始めて、修行は完成する。

このような禅の修行の深まり行く過程を、弟子たちのために何とかわかりやすく示すことができないかと考えている禅の師匠があった。中国は北宋の末頃（12世紀初頭）の人、臨済宗の郭庵師遠かくあんしおん禅師である。「無し無し無し」の空明鏡の境地に至るまでの次第を分かりやすく示して、若い弟子たちが己の修行の至り具合を測り、修行の励みにしてもらおうとしたのである。

そこで郭庵禅師は、見いだすべき「真実の自己＝無位の真人＝仏性顕現の人」を身近な「牛」の姿に託し、これを探し求めてついには「牛＝仏性」を捕まえるにいたる少年を、修行者と見ることを思いついた。つまり彼は、禅の修行深化の過程を、「少年＝修行者＝まだ浅ましき現実の自己＝自己中心の自己」が首尾よく「牛＝仏性＝空明鏡」を捕まえるにいたる物語として、描こうとしたのである。それは、十枚の絵イラストと、そのそれぞれ付した頌しゆ（詩）によって成し遂げられた。それが『十牛図』である。

## 2 原罪

十牛図の第一章「第一・尋牛」は、少年（未だ浅ましき現実の自己）がどうやら山中にあって、すっかり途方に暮れている場面から始まっている。彼は牛（真実の自己＝仏性）を捕まえたいと願い、これを尋ねる旅に出た。しかしさてどちらへ向かって尋ね始めたらよいのやら、トンと見当もつかずあちこちウロウロするばかり。

十牛図はこのようにいきなり牛（真実の自己、それが実は空っぽ、無、空円鏡であることが最後になって分かる）を尋ねだす場面から始まっているのだが、それはこの本が、修行者に向けて、つまり菩提、悟りを求める心（菩提心）をすでに起こしている人々に向けて、書かれているからである。

ところが私たちには、さしあたりたいていの「発菩提心」ということが、サッパリ起こらないのである。仏法を求め、悟りを求めることなんぞ露ほども思わず、ひ

たすら「金と女と名誉・地位」にがんじがらめに縛られて、それらを追い求めているからである。というのもしあたりたいていの私たちは、「ケチでスケベで見栄っ張り」だからである。

こうしてわたしたちは、より「富める自己」、より「強い自己」を求め、買った負けたといいは喧嘩し、悪口を言い、怒り、憎み合う。勝てば自惚れ、負ければ怨む。そうしてこういった喜怒哀楽の姿以外の人間の有りようは、まったく想いもよらなくなる。かくして「ヨクハナク ケッテイカラズ・・・デクノボウトヨバレイツモシツカニワラツテイル」無私で無欲な者、ソウイウモノニダケハナリタクナイ、という仕儀になる。そもそもそんなデクノボウには人間臭さがなく、ほとんど痴呆じゃないかと、頑迷に思いこんでしまうのである。

ところで「ケチでスケベで見栄っ張り」というさしあたりたいていの私たちの日常の有様を、アウグスティヌス(354～430)は、私たちが「原罪＝宿罪」を負っているからだと言った。彼によれば、人間の浅ましいほどの傲慢さ＝自己中心性とは、神命に背いた人間の始祖・アダムとイヴ以来、人間が生来背負わざるを得ない神からの逃亡の罪に由来するのである。『創世記』の物語(3章)に基づいて、アウグスティヌスはそのように考えた。

神からの逃亡者は、競争し相争うこの世こそ真実の世界であると思ひこみ、実はそれが迷妄マヤ＝Illusionであることに一向に気づくことができない。自分ではマヤに気づきようがないまま、買った負けたを繰り返すということ、それがキリスト教の考えでは、原罪を負っているということ、罪人であるということである。

だからイエスは、十字架上の彼の手足に釘を打ち込み、彼からはぎ取った衣服をくじ引きで分けた人々を、「父よ、彼らをお許しください。彼らは何をしているのか自分で分からないのですから」(ルカ 23-34)と祈ったのである。罪を犯している者は、実に「何をしているのか自分で分からない」のである。

イエスは十字架上で祈りつつ、午後三時には「エロイ エロイ ラマ サバクタニ 我が神、我が神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(マルコ 15-34)と叫んで息絶えた。そしてイエスの死から三日目の早朝、彼の墓にやって来たマグダラのマリアは、遺体が墓から消え去っているのを見つけ、仲間達に伝えた。弟子ペテロは、墓へ走っていき中をのぞき込んだ。するとそこにはイエスの遺体はなく、それを包んでいた亜麻布と、そ

してもう一つ、彼の頭に巻かれていた布きれが、少し離れたところに巻かれたままになっているだけであった。マグダラのマリアが墓の外で泣きながらたずねていると、イエスが彼女の前に姿を現し「マリア」と呼びかけた。マリアは振り向いて「先生先生」と言った。そしてその日の夕方、イエスはふたたび弟子達の前に姿を現した。こうして彼らはイエスの復活の目撃者、証人となったのである。聖書はおおむねこのようにイエスの死と復活を伝えている。

父なる神は、子・イエスをこの地上illusionに送り、自分に釘を打ち込む者をさへ許し給えと祈させたのだ。いったい私たちのうちの誰が、自分に釘を打ち込む者のために祈りを捧げることができようか。それを祈れるのは、「神の子」を置いてはない。

私たちは、イエスが十字架上で祈りながら死に、そして復活したことを目撃して始めて、イエスが神の子であることを確信し、信仰を得ることができる。信仰はイエスを通して与えられたのである。信仰はイエスをこの地上に贈り給うた父なる神によって恵まれたのである。私たちがこうして信仰を得たとき、私たちの罪は消える。つまりイエスとその十字架上の死と復活によって、私たちに信仰を恵み、その信仰によって父なる神が私たちの罪を消してくれたのである。原罪を贖うとは、私たちに信仰を与え、その与えた信仰によって、父なる神が私たちの原罪を消すことである。

イエスを通して信仰が与えられ、父なる神によって原罪が消されたとき、それまでの驕りと貪欲が私たちの心から消える。「二度とこんなことは致しません」と、己の自己中心性、浅ましさを懺悔する。それまでのように己の力を誇りそれを頼りにするのではなく、我が身一身を「思し召しのままに」神に預けるのである。それまでの浅ましい自分は消え、その意味では「無私」となる。それが懺悔であり、信仰である。この懺悔＝信仰において私たちは、父なる神によってそれまでの罪を許され、即ち原罪から開放される。こうして私たちは、金と女と名誉・地位に夢中になっていた迷妄マヤから脱却することができる。私たちは、たとえどんなに大きな罪を犯すことがあっても、イエスを神の子と信じ、彼を道とすることならば、父なる神に至るのである。キリスト教はこのように教えている。

ところで遺体が消えるという事態は、現代チベットでも報告されている。チベット仏教「大いなる完成」の指

導者ナムカイ・ノルブ(1938年12月8日生まれ)は、その著『虹と水晶』(法蔵館)において、彼の生まれ故郷に住んでいた老人が、自分は七日後に死ぬから部屋の中に閉じこめておいてほしいとみんなに告げたと、報告している。それは、死後遺体が消え去るという「虹の身体」の修行が成就することを意味している。そこでこのニュースは、遠くの地方にまでまたたく間に広がり、多くの人が集まって、「公開の見せ物のようになってしまった」(p178)。七日後に部屋が開けられると、「残されていたのは、・・・髪の毛と爪だけであった。・・・全員が、男が身体を残さずに去っていったという事実を目の当たりに見たのである」(同)。

ナムカイ・ノルブはさらに、このような悟りに達したものは「現実の肉体を持って姿を現すこともある。(大いなる完成の最初の導師) ガラップ・ドルジェや仏陀はその例なのである」とも言っている。

復活という事態にも、他の報告例がある。十牛図の最後に登場するのは悟りを完成し、弥勒の化身とも言われた布袋老人(?~916)の姿であるが、彼はいよいよ遷化というときに、岩に端座して「弥勒 真に弥勒 分身百千億 時々時人に示せども 時人自ら識らず」という詩を作り、そのまま姿を消したと言われている。そして遷化の後しばらくしてまた姿を現したというのである。イエスと同じである。

ところが、虹の身体とか布袋様とか、どうせデッチアゲにちがいない、イエスの復活なんぞもイエスを祭り上げようとする弟子達の作り話、とうてい信じられはしない、と多くの日本人は思うにちがいない。そんなことは、私たちのもつ知的経験をベースにしては、とうてい理解できはしないからである。

その昔、地球が動いているなんて、誰も信じはしなかった。またその昔、江戸から大阪まで二時間半ほどで来られるとは、誰も理解できず、信じなかった。またアインシュタインが出るまで、質量とは光速の二乗で割ったほど膨大なエネルギーの固まりだということ(=  $mc^2$ ;  $m=e/c^2$ )を、誰も理解できず、信じはしなかった。そんなことは、それまでの知的経験にはふくまれていなかったからである。

このように私たちは、たいていそれまでの己の知的経験をベースにおいてのみ分別する。言いかえれば、己の分別の領域を頼ってしか理解しない。それが実は、自己中心性に縛られていることの一つの現れなのである。し

かし、私たちはそのことに気づかない。気づかぬまま、知的分別を中心に置き、それにのみ頼る。そのとき、復活なんぞはデッチアゲだという不信が、必ず生まれる。知的に分別、分析する心には、神を求める心は生じないのである。イエスを神の子と認めることはできず、イエスを道として父なる神に至ることはできない。私たちは相変わらず、金と女と名・地位に縛られ続ける。まことに私たちの原罪＝自己中心性の闇は、深い。牛を求める旅支度＝発菩提心すら、とうていかなわないのである。

### 3 宿業

イエスの十字架上の死とその後の復活は、父なる神がイエスをとおして私たちに与えた恵みである。この恵みを目撃することによって、私たちは己の知的分別を超えた事象を認めることができる。そのとき不信は信に転じて、信仰を授かるのである。このとき、神を求め、神に一身を任せる心＝菩提心が生じるのである。では仏教では、菩提をを求める心はどのようにして生じるとされるのであろうか。

キリスト教が「原罪＝宿罪」と言うところを、仏教では「業＝宿業」と言う。宿業とは、無限の過去世で行った行為が因となり、それが現世の行いとなって現れ、現世の行いがまた来世に現れることを言う。そしてキリスト教の説くアダムとイヴ以来の「原罪」は、浅ましい自己中心性という迷妄を引き起こすとされるが、仏教が言う綿々たる過去世からの「業＝宿業」は、①生、②老、③病、④死の「四苦」を生み出すとされる。

キリスト教	原罪⇒マヤ迷妄	浅ましい自己中心性
仏教	宿業⇒四苦	生・老・病・死

ところで中国浄土教の大成者、善導(613～681)は人間の有様を「貪瞋邪欺奸詐百端事同蛇蠍」と言った。私たちは貪欲で(貪)、怒り(瞋)の心を起こし、誤った考え、邪見(邪)に陥り、人をあざけり欺き(欺)、よこしまで悪賢く(奸)、嘘を言う(詐)。私たちの生活は、そんなことばかりで満ち満ちている(百端)。私たちのやることなすこと、すべてこれ、蛇や蠍と同じようなものだ(事同蛇蠍)。そういう私たちだから、悪口、怒鳴り合い、憎しみ合い、喧嘩、訴訟、殺人などの絶えることがないのである。だから、絵に描いたように幸せな家庭なぞ、世間には一軒としてありはしない。それが、浅ましい自己中心性の生み出す①「生」の苦しみである。宿業は結局苦

を生み出す、と仏教は言う。

さらにどんなに美しい娘さんも②「老」いてゆかざるを得ない。臨済宗の僧、一休(1394～1481)は「世の中は娘が嫁と花咲いて、嬬としぼんで、婆と散る」と、言っている。まことに人生の時は短い。老いへの恐れは、人々を苦しめるが、さしあたってどうにもならない。

また③「病」の激烈な苦しみを一度も経験しない者はいないだろう。

最後には④「死」が私たちを待っている。いかに「千年も、万年も生きたいわ」と思っても、かなわぬ夢である。これらの「生・老・病・四」の「四苦」を、人間は避けることができない。それは人間が何億万年もの過去世からの「宿業」を負っているからだ、と、仏教は教えるのである。

この「四苦」のほかさらに、もう四つの苦しみがあると仏教は言う。どんなに愛する者ともいづれ別れなければならない苦しみ(⑤愛別離苦)、恨みに思う相手とも出会わなければならぬ苦しみ(⑥怨憎会苦)、求めても求めても手に入れることができない苦しみ(⑦求不得苦)、これらの苦しみを私たちは避けることができない。そして最後に人間の生存そのものが苦しみ(⑧五蘊盛苦)である。まことに人生は「四苦八苦」することになっている。

人間の有様の全体を示す「五蘊」とは、「色・受・想・行・識」のことである。①色とは身体とその環境(対象)、たとえば、女とその身の周りにいる男である。女はその男を見る、すなわち感受する。これが②「受」である。それから彼女は彼を「愛おしい」と想う。それが③「想」である。さらに「雪はげし抱かれて息のつまりしこと」(橋本多佳子)となる。これが④「行」である。そして愛しい男が来ないとなれば、「つひに来ず炉火に赤き釘拾ふ」(同)ということなる。これが⑤「識」である。「乳母車夏の怒濤に横向きに」(同)も同じだ。抱かれて息のつまった喜びは、焼け釘を拾う嫉妬となり、また怒濤へ横向きに乳母車を置く哀しみともなる。

喜・怒・哀・楽のうち、喜と楽だけを手に入れようというのは、一万円札の表だけくれというようなものだ。一万円札の表(喜・楽)が殖えれば殖えるだけ、ますます裏(怒・哀)も殖えるのが道理である。表裏一体、苦楽一

体だからである。かくして抱かれて悦んだ女流俳人橋本多佳子の心には、いま真っ赤に焼けた釘が突き刺さり、彼女は鬼女となって、苦しみの中をのたうち回る。

このように「色⇒受⇒想⇒行⇒識」という人間の営みのすべては、畢竟するところ「苦楽」に結着する。苦楽は一体であるから、人間存在そのものから苦を取り除くことはできない。まことに五蘊盛苦である。

そこで、この五蘊盛苦が過去世からの宿業によって生じていることをよくよく理解せよ、この身が宿業によってがんじがらめに呪縛されていることを深く深く自覚せよ、そうすれば、そこからなんとしても逃れたいという願心、菩提心が生じてくると、仏教は教えるのである。

逆に言えば、この自覚がなければ、菩提心は決して生じない。そして仏教では、この苦しみの発生するプロセスをまったく理解せず、相変わらず苦楽転変の内にのたうつことが「無明」と言われている。これについては次章で述べる。

キリスト教	イエスの死⇒原罪の自覚⇒信仰心獲得
仏教	宿業の理解⇒宿業の自覚⇒発菩提心

ところでパウロは、宿業＝宿罪（原罪）によって我が身ががんじがらめに呪縛されていることを次のように言っている。

「我は肉なるものにて罪の下に売られたり。・・・我が欲するところはこれをなさず、我が憎むところはこれをなすなり。・・・されどこれを行うは我にあらず、我がうちに宿る罪なり。・・・我が欲するところの善はこれをなさず、かえって欲せぬところの悪はこれを為すなり」(ロマ書 7)

パウロはかつて、ヘブライ名でサウロと呼ばれていた頃、厳格に律法を守るパリサイ主義者であった。その強い信念から彼は、キリスト教徒を弾圧すべくエルサレムからダマスカスへ赴いた。その途中、彼は天からのイエスの声を聞いたのである。「サウロ、サウロ、なぜ私を迫害するのか」(使徒行伝9. 4)。

この声を聞いたとき、彼は回心したのだ。そのとき彼は、自分が「肉なるものにて罪の下に売られた」身であることが分かったのである。自分は律法を厳守できるような意志強固な人間ではない、よくよく我が身を案ずれば、自分は、自分の欲する善をなしえず、欲せざる悪をなしている悪人ではないか、そんな自分を強い、偉いと思うのは、とんでもない驕り、傲慢ではないか、己は、

もはやなんら頼むに耐えない。このことが彼にはつくづく分かったのである。それが「肉の下に売られている」という「我がうちに宿る罪」の自覚である。この自覚は天からのイエスの声によってもたらされた。この自覚からパウロは、十字架上で息絶えそして復活したイエスが、神の子であることを確信し、自分の宿罪を自分に代わって償ってくれたことを確信するに至る。宿罪の自覚をおして、神からの恵みとしての信仰心が彼にもたらされ、それまでの傲慢から解放されるのである。

同様に、浄土宗の祖、法然(1133～1212)も、「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫なり。広劫よりこのかた、つねに没し、つねに流転して、出離の縁あることなし」と語っている。「わたしはまさに罪人であり、悪人であり、生老病死の四苦に翻弄されるどうしようもない人間である。何十億万年もの昔からつねに苦楽の世界に沈没し、そのたびに果てしない輪廻を繰り返してきた。だからわたし自身には、この輪廻転生する苦楽の世界から抜け出る縁がまったくないのである」。

法然はこのように、己が宿業によって呪縛されきっていることを端的に自覚する。そして彼の場合には、この「罪惡生死の凡夫」の自覚から、己を頼って修行に励む自力聖道門の立場を取ってはい、もはやとうてい苦界から脱することはできないことが自覚される。そこで法然はこの自覚から、「たとひ一代の法をよくよく学すといへども一文不知の愚鈍の身になして尼入道の無智のともがらに同して智者のふるまいをせずしてただ一向に念仏すべし」と、ひたすらの称名念仏へと転じるのである。「罪惡生死の凡夫」を苦界から救い出せるのは、南無阿彌陀仏の名号以外にないことを、法然は前述の善導の『観無量寿経疏』から確信するに至るのである。

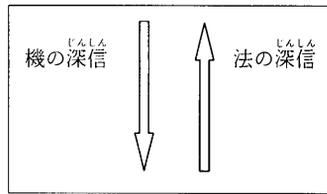
親鸞もまた「愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑す。恥ずべし、傷むべし」と己の浅ましい姿を痛烈に嘆いている。いい年をして、まだ相変わらず女に気を取られる。その上、先生の御講義には感銘いたしましたなどと言われて、脂下<sup>やに</sup>がっている。己のスケベ根性、智者ぶり、インテリ臭さ、見栄<sup>みえ</sup>張り<sup>はり</sup>は、まったくもって浅ましい、痛ましい、恥じ入るばかりだ。「一文不知の愚鈍の身」になぞ、とうていなりきれない。「尼入道の無智のともがら」と、とうてい同じにはなりきれない。どうしてもこの驕りが脱けない。この名利の一筋が消えない。己の背負った宿業が兆してしまうのを、親鸞は抑えることができない。

だから親鸞は「兎の毛羊の毛のさきにいるちりばかりもつくる罪の宿業にあらずといふことなし」と言うのである。ウサギの毛の先の塵ほどのかすかな罪、ヒツジの毛の先の塵ほどの微少な罪でさえ、宿業の催してないものはない。故法然聖人は「さるべき業縁のもよほせばいかなるふるまいをもすべし」と言っていた。親鸞には、法然のこの言葉が痛いほどに分かる。「さるべき業縁のもよほし」によって、今自分は「愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑」しているのだ。かすかに残る「名利」の思い、それこそ「兎の毛羊の毛のさきにいるちりばかりもつくる罪」にはかならないではないか。自分の力ではこの宿業からとうてい逃げ切れない。そんな自分が、自力聖道門の大変な修行なんぞできようはずもない。「いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定住み処ぞかし」である。

このような針で鋭くつついたような宿業の自覚から、親鸞は法然の後を追うことになる。「念仏は、まことに浄土にむまるるたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じててもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ」と、親鸞は言い放つ。「念仏して浄土に行けるか、地獄に墮ちるか、そんなことは俺はまったく知らん、そんな分別は、そもそも俺のするところではない。たとえ法然上人に欺かれて念仏して地獄に墮ちたとしても、なんの後悔があるか」。なぜか、「そのゆへは、自余の行を上げみて仏になるべかりける身が、ねんぶつをまうして地獄におちてさふらはばこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらふめ。いずれの行もをよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」。親鸞の念仏は、分別、知的理解の上の念仏ではない。自分の宿業の深さの実感に反比例して、念仏が浮上してくるのである。「自分が念仏以外の自力聖道門の修行をして悟りを開くことができるような身であるのなら、法然聖人に欺かれて念仏して地獄に墮ちたと後悔することもある。しかし宿業にがんじがらめに縛られている我が身では、とうてい念仏以外のどんな修行も全うすることはできない。そんな俺には、ハナっから地獄行きが決まっているのだ」。

自分の背負った業のため、自分は地獄に向かって深く深く落ちていく。親鸞は自分がどうしようもない人間であること、つまり自分が「悪人」であること、言いかえれば「肉なるものにて罪の下に売られた」身であること

を深く信じるのである。これが「機の深信」である。「悪人」「罪人」の自覚が深まれば深まるほど、そこにこの悪人を救わねばおかぬという阿弥陀仏の誓願が、高く高く立ち昇る。誓願の確かさがここでハッキリハッキリ信じられるのである。それが「法の深信」である。それが「如来よりたまはりたる信心」である。「機の深信」の深さが、「法の深信」の高さを確信せしめる。逆に「法の深信」の高さが、「機の深信」をより深めていく。両者の関係は「落つる釣瓶に昇る釣瓶」である。これが浄土門で言う「二種深信」である。浄土系仏教では、このように、「悪人」の自覚をきっかけとして「如来よりたまはりたる信心」の兆しが生じるのである。



しかしさしあたり多くの人間は、宿業が苦を生み出しているプロセスを理解することもなく、したがって己の背負った宿業を針で刺すほどに自覚することもない。そうして苦楽一体の憂き世にあって、金と女と名誉・地位に夢中になり続ける。とんでもない失敗をして、もはや懲り懲りという経験でもしないかぎり、菩提心はなかなか生じないものである。

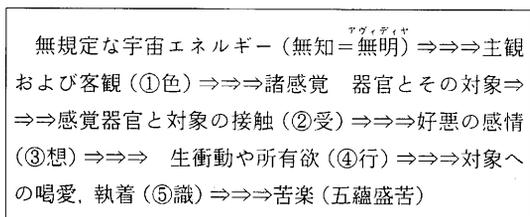
#### 4 無明

ところでキリスト教では「原罪」の原因はアダムとイヴの背信、墮罪に求められたが、仏教では「苦」を引き起こす「宿業」の原因はどこに求められるか。「世親」(ad 320頃～400頃)の『俱舍論』によると、「宿業」は「無明」から生じるとされる。

キリスト教	アダムとイヴ⇒原罪⇒迷妄(浅ましき)
仏教	無明⇒⇒⇒宿業⇒四苦八苦

「無明」とは、「ヴィディヤ=ビデオ=見ること」が「ない」こと、見えないこと、すなわち根源的な無知を意味する。つまり金と女と名誉・地位に縛られて、宇宙や人間の真実のあり方がサッパリ見えないこと、言いかえれば、神が見えぬ、仏性が見えぬことを意味する。世親によれば無明とはまた、無規定な宇宙エネルギー

がただ渦巻く混沌である。世界はこの混沌たる宇宙エネルギーから徐々に形づくられてくる（ギリシャ神話の「カオス」を想起せよ、あるいはアナクシマンドロスの「無規定なるもの」を想起せよ）。『俱舍論』によると、無規定な宇宙エネルギーから、まず主観及び客観（先述の五蘊の①色＝身体とその環境）が生じ、さらに主観は諸感覚器官等々の生理機構へ、また客観はその諸対象へと細分化されていく。諸感覚器官とその対象は接触し（五蘊の②受）、そこに好悪の感情（五蘊の③想）が生じる、さらに性衝動（五蘊の④行）や所有欲の芽生えとともに、対象への激しい喝愛と執着（五蘊の⑤識＝煩惱）が生じる。かくして喜びと楽しみへの喝愛と執着が、結局はそれらを失わざるを得ない老、病、死への恐れとなり、畢竟四苦八苦を生み出すことになる。



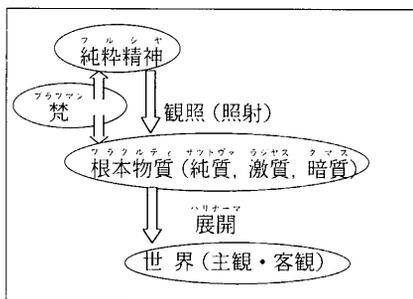
無知なる無明を因とするがゆえに、⑤の識もまた無知である。つまり苦楽の認識、たとえば焼け釘を拾っている橋本多佳子の認識も、実は宇宙と人間の真実のあり方に関して全く分かっていないのである。つまり彼女は「なにがなんだかわからない」まま、焼け釘を広う。

無規定な宇宙エネルギーから世界が形づくられる、つまり主観（心身）も客観（対象）も形づくられるといった考え方は、実はbc1500～1000というはるか昔に成立したバラモン教の聖典『リグ・ヴェーダ』にすでに現れている。拙論『ヒンドゥ教の成立過程』に述べたのでここでは詳述しないが、インド古代の聖仙たちは『リグ・ヴェーダ』の中の「宇宙開闢の歌」で、しるしのない水のような、風もなく自力で呼吸する「かの唯一物＝梵」から宇宙が作られてくる様子を歌っている。かの唯一物＝梵が自己を顕現せんとする「熱烈な欲望」を起こし、自ら、展開することによって、宇宙は作り出されたのだと、彼らは歌う。

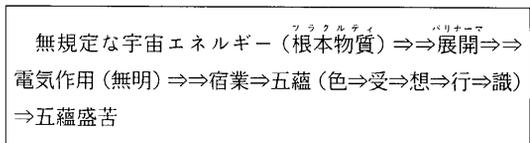
この考え方をもとにしてバラモンの哲人カピラ(bc350～250?)は、永遠にして不動なる梵が、その不動から動に転じて、世界へと自己自顕する際の二つの原理を解き明かした。一つは世界形成の質量因となる根本物質と言

われ、他の一つは機会因となる純粹精神＝我と言われる。両者共に梵の自己顕現への、動への意欲の現れとされる。

この二元論を受けてイーシュバラクリシュナ＝自在黒(ad2c～4c)が『サーンキヤ頌』を著した。これによると、純粹精神＝我による根本物質の観照を機会因として、根本物質を構成する純質、激質、暗質といった三要素の平衡が崩れ、それらは不動の状態を脱して自ら展開し、主観及び客観となると言われている。つまり世界（主観及び客観）は、梵の現れである根本物質が梵自身の造化力によって変じたものにほかならない。世親が世界を作り出す混沌たる無規定の宇宙エネルギーといったのは、この根本物質と同じだと言ってよい。



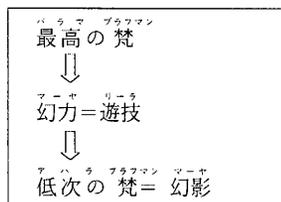
世界は純質、激質、暗質といった三要素の展開である。だから私たちの心身＝脳と肉体も、結局は根本物質の変容である。ところが人々にはこのことが見抜けない。受、想、行、識といった脳の作用は、実は根本物質の引き起こす電気作用でしかないことが見抜けない。見抜けないまま喜怒哀楽といった脳の電気作用に翻弄され続けるのである。この翻弄の様を、世親は無明と言ひ、その無明が宿業を引き起こし、五蘊盛苦を引き起こしていると言ったのである。



ところで「仮面の仏教徒」とも言われるほど大乘仏教の影響を強く受けていたベーダント学派（ヴェーダの終極を研究する学派）の哲学者ジャンカラ(700頃～750頃)は、上記のサーンキヤ学派が主張する根本物質と純粹精神の二元論に対し、梵の不二元論を主張しておおむね次のように言っている。

ジャンカラによれば、真実に存在するものは永遠にし

て不動の最高の梵のみである。これに対して、瞬時に変動する喜怒哀楽の世界は、最高の梵が己を顕現せしめるべく幻力によって仮に姿を現した低次のものにすぎない。つまりそれは、低次の梵 = 自在神 = 最高の梵の幻影である。世俗世界とは梵の遊技なのである。しかるに人々は、苦楽一体の世俗世界が単なる現象、幻影であることを見抜けないまま、幻影を現実、真実と見なしている（プラトンの「洞窟の比喩」を想起せよ）。



苦楽の世界はこのように真実在にあらざるものとして否定されるべきものだが、幻影をそれとして見抜くことができたとき、つまり修行によって本当に神を知ったとき、その幻影もまた最高の梵の現出として、つまり聖なるものとして、救い取られる。苦楽は幻影として否定されるが、結局は肯定される。言いかえれば煩惱は否定されるが、修行の結果得られる智慧においては、肯定される。シャンカラは概ねこのように考える。もちろん彼のこういった考えは、仏教の「煩惱即菩提」、「色即是空」から来ていることは論を待たない。

サンキヤ学派の根本物質と純粹精神の二元論は、ベダンタ学派の梵不二一元論と一見対立するように見える。梵が自己顕現への「熱烈な欲望」を起し、自ら、純粹精神と根本物質の二者へと展開し、前者が後者を観照することを機会因として、根本物質から世界宇宙は作り出されると、イーシュバラクリシュナは言う。つまり彼の場合も、世界は結局、梵の自己自顕である。この点は、最高の梵が低次の梵として化現すると言うシャンカラの主張と変わりはない。ただシャンカラは梵の純粹精神と根本物質の二者への展開ということを書かないにすぎない。

いずれにせよヒンドゥ教の思想家たちが教えるところでは、苦楽の世界は実は梵の顕現した姿、幻影であり、このことを見抜けない人々は苦楽の波に翻弄され続けるのである。世親の無明とは、ヒンドゥ教の幻影であったのである。

## 5 第一・尋牛へ

無明のゆえ、幻影のゆえ、私たちの心の内では欲望の炎が燃え盛る。これを仏教は煩惱熾盛と言う。私たちは、何億万年の間、煩惱熾盛の苦楽の世界を輪廻してきた。この苦楽の世界こそ私たちがもっとも慣れ親しんできた世界であり、それゆえにこれを捨てることは、なかなかできないのである。親鸞の『歎異抄』の言葉は、この次第を語っている。

「久遠劫よりいままで流転せる苦惱の旧里はさすがにたく、いまだむまれざる安養の浄土はこひしからずさふるふこと、まことによくよく煩惱の興盛にさふるふにこそ」親鸞が言う「流転せる苦惱の旧里」とは、伝統的用語でいえば「三界火宅」である。三界とは三つの領域、つまり、人間が迷う三つの有様を言う。

その第一は「欲界」で、食欲と淫欲が支配する世界である。つまりは、ケチでスケベな人々が住む世界である。ここで人々は、我が身大事とばかり、絶えず浅ましい闘争を繰り広げている。

次の第二は「色界」(色=物質)といわれる。食欲、淫欲の二欲を離れた人々が住む世界であり、ここには清らかで純粹な物質のみがあるとされる。ケチも卒業し、スケベも卒業し、ものごとを「究める」人々がすむ世界。たとえば、ひたすら技を磨く宮大工や陶芸家、あるいはまた、自分自身の肉体の極限を追求するアスリートたちが住む世界である。しかし彼らの極めるものも、それが物質なるがゆえに、いつかは朽ち果てていく。神社、仏閣も青磁、白磁もいつか壊れ、鍛え上げた肉体も必ず滅んでいく。

そこで最後の第三の世界では、壊れざるもの、すなわち、非物質的なものを究める人々が登場する。この世界は「無色界」と言われる。物質(色)がまったく存在しない世界である。すなわち諸処の学問の世界、あるいは、芸術の世界である。しかしなぜこの世界さえも迷いの世界なのであろうか、この世界に潜む迷いとはいかなるものか。

松尾芭蕉(1644~1694)はこの「無色界」に生きた。そして臨終に臨んでもなお、句作の姿勢を崩そうとはしなかった。最後の一句は「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」である。

さらにまた、明治三五年九月十九日午前二時に絶命した正岡子規(1867~1902)は、仰臥のまま板張りの紙に

辞世の句を、三句記した、「糸瓜咲て痰のつまりし仏かな」、「痰一斗糸瓜の水も間に合はず」、「をととひの糸瓜の水も取らざりき」。

すごい執念である。臨終の床にあってもまだ句を作ろうとする飽くなき執着。これが迷いなのである。芭蕉も子規も、「無し無し無し」の「無位の真人」としては死ねないのである。彼らは最後まで「無位」ではなく「有位」であった。すなわち「芸術家」という「位」を棄てることは、彼らにはできなかった。最後まで「才能」というレッテルが残った。彼らは己を頼むという「我慢」を、この最後の一筋を、切り捨てられなかった。

ところで捨聖とも称された遊行上人一遍(1239~1289)は、死の二週間ほど前、「一代聖教皆つきて、南無阿弥陀仏になりはてぬ」と述懐し、持っていた書籍などをすべて焼き捨ててしまった。

彼にはもはや口に名号を称える以外「無し無し無し」である。熊野本宮証誠殿で「信、不信をえらばず、浄、不浄をきはらず、その札を配るべし」との啓示を受けて以来、彼の称える名号は、信、不信あるいは浄、不浄といった二元対立におけるものではない。つまり一遍の場合、念仏は、親鸞のように確たる「信」に基づかねばならぬわけではない。一遍の念仏は浄なるものでもなければ、聖なるものでもない。信・不信、浄・穢、聖・俗、そういった洒落臭い二元論(分別)は、すっかり消えてしまった。そうして彼は、ただ息をするように「無し無し無し」の念仏を称え、遊行し、踊る。子供が歌い、遊び、踊るようなものだ。彼は「無色界」すらすでに遠く捨ててきてしまっているのである。

その捨ててきた「三界」を、一遍はこう言っている。

「男女和合の一念是妄執の源(欲界). 華を愛し月を詠ずるややもすれば輪廻の業(色界). 仏を思ひ経を思ふともすれば地獄の炎(無色界).」

芭蕉や子規ですらも、「ややもすれば輪廻の業」に落ち込み、「ともすれば地獄の炎」に焼かれるのである。

なぜこれほどにまで人間は、「三界火宅」から出ることができないのであろうか。何故に「苦悩の旧里はすてがたく、いまだむまれざる安養の浄土はこひしからずさふろふ」なのか。なぜか？

それは、ヒンドゥ教の言葉で言えば、梵がその幻力に

よって遊技するからである。仏教の言葉で言えば、私たちは無明を因とする宿業にがんじがらめに縛られているからである。キリスト教の言葉で言えば、人間がアダムとイヴ以来の原罪を背負っているからである。偉大な伝統的宗教は、結局、同じことを言おうとするのであるから、どの表現をとっても良い。

ヒンドゥ教	梵の幻力による遊技
仏教	無明を因とする宿業 火宅(五蘊盛苦)
キリスト教	アダムとイヴ以来の原罪

幻力により、宿業により、原罪によって私たちは、欲深き浅ましき身となる。「無色界」においてすら私たちは、己を頼むという「我慢」の最後の一筋を消すことができない。しかもさしあたってたいい、私たちはそのような己の浅ましさに気づかず、それこそが人間的であると思ひこむ。この頑迷な思ひこみがマーヤ幻影であり、無明であり、原罪なのである。

ではこの思ひこみから脱出する術はあるのか。

「四門出遊」の伝説は、その術の一つを示している。仏陀がまだゴータマ・シッダールタと呼ばれる王子であったとき、カピラ城の東の門を出て老人と会い、次に南の門を出て病人と会い、さらに西の門を出て死者の葬列に出会った。つまり彼は老・病・死という人間のはかない姿に出会ったのである。そして最後に北門を出たとき、彼はまことに清々しい沙門(出家者)と出会って、自分の進むべき道を発見した。二十九歳のことだと言われている。

カピラ城は「火宅」である。なぜならそこには妻もおり、息子もおり、政治が待っているからだ。その火宅から彼を出させたもの、つまり「出家」せしめたものは、「清僧」の姿であった。「自分もあのように生きたい」。

これは一つの脱出方法である。ペテロら十二人の使徒にとっては、「清僧」とはイエスであった。「イエスのように生きたい」。そう思ったとき彼らは、神からの恵みとして信仰を獲得し、己の浅ましきから抜け出たのであった。

私たちにも、このような「清僧」に出会うチャンスはあるのだろうか。書物を読むことは、このようなチャンスになるのではなからうか。私たちは、経典の中で仏陀

に出会い、聖書の中でイエスに出会うこともできる。書物の中でマザー・テレサに合うこともできる。DVDも出会いのチャンスになるかもしれない。

たしかに学問なんぞしておいては、「ともすれば地獄の炎」ではある。しかし学問はやっしまわなければならない。やっ始めて、学問に捕らわれないでいる境地に達することができるのではなからうか。「空手把鋤頭」(手は空っぽのまま鋤つゑを握っている)とは、たとえば、学問をしながら「俺はこれだけの学がある」なんぞいう意識をまったく持たないことであろう。この意識が残るならば、「地獄の炎」である。

「火宅」から一生抜け出ない人もいる。また抜け出る人もいる。そのきっかけは、まことに人様々である。「欲界」にあって「愛欲の広海に沈没し」つつ、嬉々としている面々も入れれば、もう懲り懲りという経験をする人もいるだろう。「色界」の中で切磋琢磨し、

くうしゅにたしてしようをにぎる  
「空手把鋤頭」の境地に達する人もいるだろう。「無色界」にあって、「名利の大山に迷惑」しつつ自慢に陥る人もいれば、針で刺したように鋭く己の傲慢を感じとり、浄土門に至る人もいるだろう。

時が熟して始めて、わたしたちは、原罪による浅ましき、宿業による輪廻転生、無明による眩しいほどの幻影マゴヤに、それぞれの仕方で気づくことができるのである。逆に言えば、未だ時、熟さざれば、気づきは決して生じない。柿、熟さざれば、決して落ちることはない。つまり、気づきとはなるほど己が気づくのではあるが、それは「恵み」として己に与えられるものなのである。それが「恵みとしての信仰」、「如来よりたまはりたる信心」ということである。

以上本論では、「三界火宅」から一步を踏み出し、第一・尋牛へと向かう準備を為したのであった。

## Summary

Zyugyuzu shows the deepening process of Zen practice. The first stage of this book draws a boy who left his secular home and is now looking for the caw. The caw means satori, enlightenment. But in our case we for the time being stay in our secular house where we have deep desire for money or reputation. Why don't we leave our house where our greed is burning? Because original sin binds us. How can we go out from this house?